

「マツタク、余計なことハしなくてイイと聞いたのに」
パイは倉庫から出るとそばにいる人間にそうつぶやく。

「いえ、ですがこうしたほうが確実に赤い死神は来るかと…」

「だから、それが余計なことなんデすよ。別にかれらのような雑魚を使ワなくテも、赤い死神の道中ヲ襲えばイイだけだろう？ 君ラとしては赤い死神を殺せばなんら問題はないんだから」

「ですが、確実に」

「あー、分かった分かった」

パイはこれ以上の問答は無駄だと思い、話を変える。

「デ、ソの赤い死神をイツおびき出すンデす？」

「明日がいいかと。明日になれば二人が行方不明になったと問題になるでしょうから、そのときに二人は預かっていると連絡を取ります」

「フーン。じゃあ私は明日くる赤い死神戦に備エて寝ますね」

「はい。では、ホテルまでご案内しましょう」

「いや、私モ今日はこの倉庫で待機することにします」

「？ なぜですか？」

その言葉にパイはにやりと笑って答える。

「いえ、あの二人がドウモ逃亡を図っているようなので：

…」

「それならご安心を。我々も能力はもっていませんが、武装しております。それに何より、弱肉強食のこの世界で生き残れるよう、日々鍛えてあります」

「はっ、そうですか。わかりました。では貴方たちガどのくらいできるか、この目で見てもよろしいですか？」

「どうしても残ると？」

「何カ問題でも？」

「いえ、まさか貴方がここに残られるとは思ってもみなかったものですから、何も用意していませんよ」

「ああ、別にイりませんよ。そこらへんの壁に寄りカカって座って寝ますから。では、お休み」

「わかりました。お休みなさいませ」

「あ、ソウソウ」

「なんですか？」

「ミナに徹底しておいてください。寝てイル私になるべく近づかないように。それと、間違っても、寝ている私に触れないように。モシその禁を破れば、命はないと。ああ、そうだ。もし私に用があるときは、5 m以上はなれて、声をかけてくれればおきますので」

「承知しました」

「じゃあ、今度こそお休み」

パイは手を振りながら歩き、闇に消えていった。そしてそばにいた男はパイの命令をすぐにみなに伝えるのだった。

「よし、淳。そろそろ行くぞ」

男が出て行って30分くらいした後、雄二は提案してきた。

「え？　いくつてどこへ？」

「決まってるんだろ、ここから脱出するんだよ」

「脱出して。そんなのできるわけ……」

「無理、じゃねえよ」

「でも」

「なんだよ、お前。怖気づいてんのか？」

「だって、相手はあの慎先生と同等の実力者だって言っただじゃない。それに銃を持っている人たちだっていっぱいいるらしいし」

「おいおい、そんなの本当かどうか分からないだろ。銃なんてこの日本にそうそうあるわけないだろ。第一、銃だったら俺たちなら防げるだろ？ お前は直接戦ってないから忘れてるかもしれないけどな、俺は銃を持ったやつに勝ったんだぞ」

「銃を持った人？ あ、そうか」

「そうだよ、白藤の四天王の一人拳銃使うやついたろ？ そのとき、俺の炎で何度も銃弾をブロックしてるんだよ。だから相手が銃を持っていたって大丈夫だ。お前だって、俺の炎と同じ強度の氷を作れること、修行のときに試しただろ。だから、銃弾だって防げる」

「でも、あの中国っぽい人は？」

「ああ、あいつな。確かにあいつはやべえよ。ただもんじやない。あいつの目はなんか、めちやくちや怖かった」

「うん、僕もものすごく怖かった」

「ああ。でもさ、だったら別にあいつとわざわざ戦わなきゃいいだけじゃん。あいつとはちあわないように逃げればいいんだよ。違うか？」

「確かに、そうだね」

雄二の言葉に一応うなずきはする。しかし淳の顔は代わらず曇っていた。

「なんだよ、まだなんか不安そうな顔してんな」

「うん、でもやっぱり……」

「おまえ、分かってんのか。俺たちがここでつかまっていたら、慎先生に迷惑かかんだぞ！」

「っ」

「そうだろ。もしやつの言葉を信じるなら、俺たちのせいで無駄に慎先生は命がけで戦うことになるんだ。第一、あいつが本当のことだったかどうかなんてわかんないだろ。俺たちを人質に、一方的に慎先生を……。いいのかよ、それで。俺

「私たちはあの人に世話になったのに。俺は絶対にいやだね」

「そうだね。うん、そうだ。僕は大切なものを守るために、まだまだ少しだけど、いままでがんばってきたんだ。慎先生とは付き合いは短いけど、僕にとってはとっても大切な先生だ。困った僕らをいつも助けてくれた。うん。そうだよ。ごめん、雄二。少し僕、弱気になってた」

「よし、いい面になったじゃねえか。いくか」

「うん、行こう」

その言葉に二人は向き合ってうなずき、そして脱出を試みる。

「で、どうやって抜け出すか」

「それなんだけど、ここ、どうやら海の近くらしいんだ」

「へえ、何で分かるんだ」

「うん、あの人が倉庫の扉を開けたとき、かすかに波の音がした。ためしに音が聞こえたほうの水を操ろうとしてみたら、すぐたくさんの水を操れそうだったんだ。もちろん、実際に操ったらすぐに体力切れしちゃうけどね」

「なるほど、操るわけじゃあないけど、そっちに精神エネルギー」

ギーを送って、操るひとつ前の状態にする。そのことで自身が操れるものの存在を感知するか。なかなかやるじゃあねえか」

「いや、うん。そこまで考えてなかった……」

「まあいいじゃねえか。よし、じゃあこの縄をとくくらいの水を持ってきてくれ。あんまりたくさん動かすとばれるからな。少しでいいぞ、少しで」

「そうだね。ばれないでできれば最高だもんね」

そして水を操り、倉庫の中にもってこようとしますが、淳はあることに気がついた。

「だめだ、雄二。水はここには持ってこれない」

「あ？ 何でだよ」

「だってさ、ここは海の近くの倉庫だよ。ってことは防水対策もすっかりしてるはず……」

「ん？ あー、そっか。水が入らないように密閉されてるかあ。あー、くっそー、しまったなあ」

ちなみに、防水対策がしっかりしてあるからといって水が入る余地がないわけではない。現に、最近のビルでは施工と

維持のために、防水は穴をふさぐのではなく、等圧理論というものを用いて穴があっても水が入ってこないようにしている。水があっても、水を建物の中に入れようという自然界の力をうまくブロックできれば水が入ってこないからだ。つまり、淳が水を操り、そして倉庫の中に入れようとすれば、ひよっとしたら水を入れることができるかもしれないのだ。しかしそんなことを二人はしる余地もないので当然、そんな考えにはいたらなかった。

「じゃあ、どうするよ。はっきり言って、俺の火はお前の水よりは見つかりにくいぜ。いったん見つかったらまえば、俺の精神エネルギーを糧として火力上げられ、維持もできるけどさあ」

「うーん、ああ！」

「なんだよ急に」

「見てあれ」

「あれってどれだよ、指差してくれよ」

「いや、縛られてるから指はさせないんだけど、あれだよあれ」

「だからどれだって」

淳は雄二に伝えようと、その場所を必死にあごをしやくることで示そうとするが、一向に伝わらない。

「あー、いいや。ちよつと待ってて、雄二。すぐ分かるから」
「なんだよ、気になるなあ」

淳は雄二に説明するのをあきらめて、行動することにした。そしてその結果、ひとつのダンボールが宙に浮かんだ。それを見た雄二は「ああなるほど」と納得した。そのダンボールには2リットルの水が6本入っていると書かれていた。そのダンボールを自身の前に淳は持ってくる。しかしそこで雄二はあることに気がつく。

「なあ、淳。よく考えたら、この水、どうやって取り出すんだ？ ペットボトルって結構硬いって聞いたことあるぞ」

「あ、どうしよう」

水を手に入るところだったか、後一步のところでは手に入らなかった。そして「どうすっかなあ」と雄二はそのペットボトルの水をあきらめてしまったが、淳はあきらめきれず、とりあえず無理やり箱から取り出す。そしてそのラベルに書い

てあることを適当に読んでいて、そしてある文字に行き当たった。

「そうだ、雄二、よくよく考えたら、取り出せるかもしれない
い」

「何言ってるんだよ、取り出せるわけないだろ。それとも水を
思いつきり操って、中からペットボトルを破るのか？ でき
るわけないだろ、そんなの。硬いんだぜ、ペットボトルって
意外にさ」

「確かに普通に操っただけじゃあ無理かもしれない。でも、
僕の付加能力を使えば……」

「付加能力ねえ……。あ、そうか」

「そう、僕の付加能力で中の水を凍らせればもしかして」
淳の付加能力は水の物質変化だ。その力でペットボトル内
の水を凍らせる。淳の力で氷を操ることはできないが、しか
し水は凍らせることで膨張する。そしてその膨張に耐え切れ
なくなったペットボトルは破裂する可能性があるのだった。
そう、淳が見たペットボトルの文字とは、まさに『凍らせな
いでください。内容液が膨張し、容器が破裂する場合があります

ます』という文章だった。

果たして彼のもくろみはうまくいった。破裂しても安全なように自分たちの近くではやらないようにし、また、他の水の入ったダンボールでそのペットボトルをおおい、仮に爆発が大きかったとしても自分たちを傷つけないようにした。そして淳は実際にペットボトルの中の水を凍らせる。それもなるべく勢いがついたほうが良いような気がした彼は、指定のペットボトル内の水を一瞬で凍らせるのだった。結果は成功。しかしバンと、少し大きめな破裂音がした。この音を聞いたとき、二人はあらかじめ他のダンボールで覆っておいて正解だと思った。だが、結果的にこの方法がよかったかといえ、間違いとは言えないものの、よくはなかった。

「よし、成功だ」

「お、マジか。やったな。よし、じゃあ早くその水を使ってこの縄を解いてくれ」

「うん、ちよっと待ってて」

淳は解放された水を自身の近くまで飛ばし、刃物状にして凍らせる。そして自身の手を縛る縄を、手を傷つけないよ

うにしながら切る。幸いにも縄はそこまで強度を持っておらず、簡単に切ることができた。開放された手を使い、今度は足の縄を切ると、雄二の縄を切るのだった。

「こつちだ。こつちでへんな爆発音が」

雄二を解放し、いくつかのペットボトルを開放し水を大量に入手し、一息ついたところで二人以外の声が聞こえた。同時に倉庫の扉が開けられる。

「げ、みつかった」

「しまった、さっきの音で気がつかれたんだ」

淳は彼のミスを男たちが入ってきてはじめて気がついた。黒いスーツを着てサングラスをかけた、見るからにかたぎではなさそうな雰囲気を漂わせるいかつい男たちが倉庫の中に侵入してくる。しかしそのことに気がいていた淳はすぐさまその男たちに向かって思い切り水を飛ばす。結果、男たちは吹き飛ばされ、気絶する。

「おー、やるー」

「のんびりしてる暇はないよ、雄二。きつとすぐに増援が来る」

「つと、そうだったな。さて、逃げるか」

雄二は自身も戦うためにライターをポケットから取り出そうとする。しかしポケットの中身はからだだった。考えてみれば当然で、彼らを誘拐してきた男たちが彼らに武器になれるものを与えておくわけがなかった。バッグなど彼らの所持品はすべて没収されていたのだ。

雄二はポケットをいくら探してもライターが見つからず、あせりだす。淳は雄二の様子がおかしいことに気がつき、「どうしたの？ 雄二」と声をかけた。

「ないんだよ、俺のライターが」

「ないって、まさかあのライター？」

「ああ、畜生、やつら俺のライター持ってきやがった」

雄二は悔しそうに歯を強くかむ。そして淳に「悪い、先にいっててくれ。俺はライターを探して……」と言いかけたところで、淳が「僕もいくよ」と彼の言葉をさえぎった。

「お前は先に行けって」

「でも、雄二だけおいとけないよ」

「でも、お前まで巻き込むことになる」

「別に今に始まったことじゃあないだろ。それに雄二にはいつもお世話になってるからね」

「ちっ、お前は言い出したら聞かねえからな。分かった。じやあ頼むぜ、淳」

「うん、任せて」

そうして、二人は採られた雄二のライターを探すことにした。

それとほとんど同じ時間、倉庫の集まった区画の入り口の近く、つまり二人を捕まえた男たちのテリトリーの外側。そこに一人の男が立っており、そして驚くことに明らかに淳たちを誘拐したと思われる一派の黒スーツが何人もたおれていた。

「潜入はなるべく静かにといわれていましたが……。まさかここまで優秀だとは思いませんでしたね。こんなに早く見つかってしまうとは……。おかげで隠密行動が台無しです」

男は、しかしまるで楽しそうに笑いながらそうつぶやいて

いた。

「まあ、良いでしょう。私に感づいた見張りやその周辺の敵はすべてのしました。これで提示連絡の時間まで、私の侵入は分からないことになります。それにこの男たちにも、私の顔までは見られていません。とつとと進入するとしますか」

男が言い終えるか否かの瞬間にダンと大きな音がした。その音は淳が倉庫に入ってきた男たちを吹き飛ばした音なのだが、彼は知る由もない。しかし彼はその音を聞き、笑みをよりいっそう大きくする。

「なにやら楽しそうなことになっているようですし、進入の難易度は上がるかもしれませんが、しかし私が侵入しているということは、敵に私の姿を見られるまでなくなったとも言えるようになったということ。まあ、幸運ととっておきましよう」

男はつぶやきながら闇に消えていく。しかし一瞬だけ街頭に男の顔が照らされる。その正体は以前慎と戦っていた、黒き闇医者と呼ばれる能力者であった。